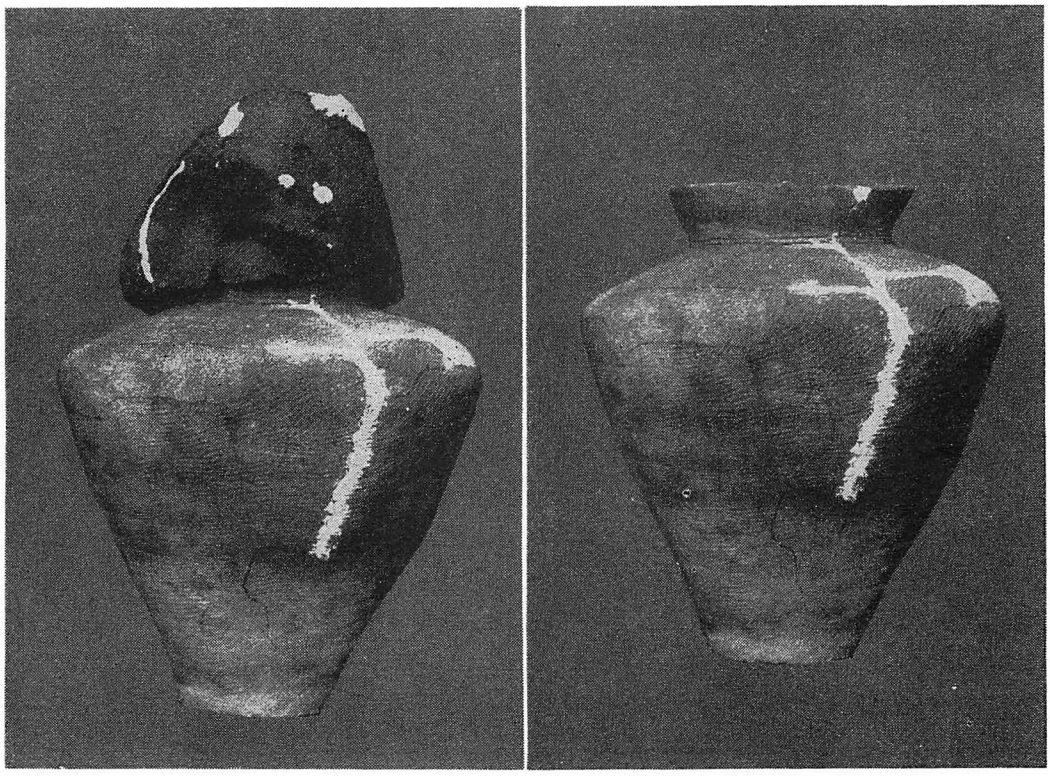
縄　文　の　甕　棺

江　坂　輝　弥

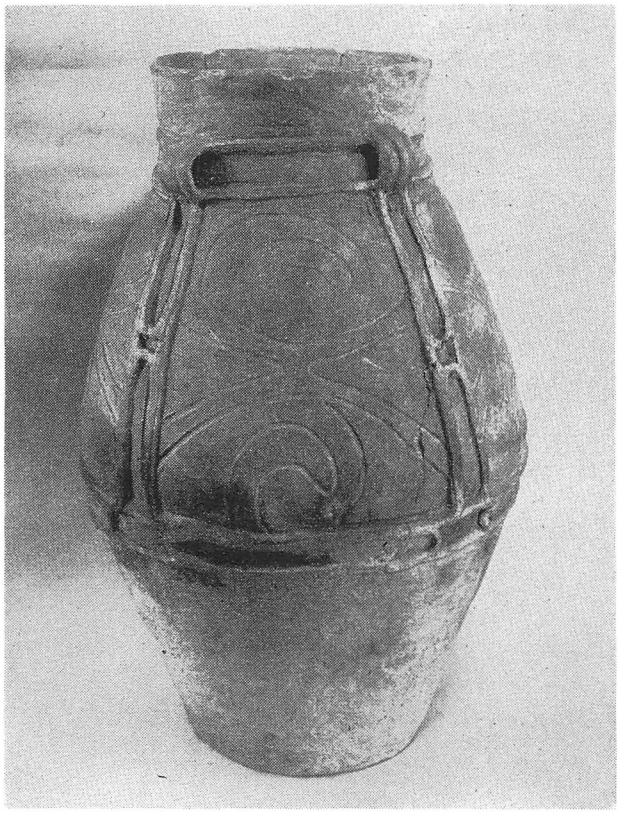
縄文土器文化の甕棺はほとんど日本列島全域にわたって存在し、今日知られるもので、最も古いものは青森県八戸市蟹沢遺跡発見の縄文文化前期末円筒下層D式の底部と口縁を欠いた円筒深鉢の土器の中に収められた乳幼児の遺骨例であろうか。本例は上、下を板石で蔽い、甕棺の南側には三個のマグロの背骨が竝んで置かれていた。マグロの切身でも供えられていたのであろうか。

東日本には単棺で、日常什器として使用した土器に死産児または生後間もない乳幼児の遺体を埋葬した甕棺例は中期以降になるとかなり各地に発見例がある。青森県三戸郡名川町平小字虚空蔵では大きな壺形土器の上部に、底部のない深鉢を蓋とした合せ蓋甕棺が発見された。この中には乳幼児の遺骨と、この生後間もない乳幼児のつけていたと思われる猪牙製首飾りと、この首飾りの中央につらねられていたと思われる、径1センチほどの硬玉製小玉が一個入っていた。



第1図　幼児合口カメ棺　　（青森県三戸郡名川町平前ノ沢）

また本州最北端の青森県下に限定して、後期初頭に改葬人骨収納埋葬用の甕棺専用の特殊な大皷型大深鉢土器がつくられた。これらの甕棺に一定の墓城へ埋葬され、一体分の人骨を二個ないし三個の甕棺に分骨収納し、その二個ないし三個の甕棺を集合埋納し、周囲と上部を平石や径30センチ大の川原石を使用して、石室状にしたものもある。恐らくこの改葬墓へ葬られた遺骨は、この甕棺へ遺骨を納入する以前、遺体の軟部が早く朽ちはてるよう、木蔭に木棺か繊維編布のようなものに



第2図　青森県三戸郡倉石村中石出土洗骨葬に
疑する成人骨を納入した甕棺の土器

包んで風葬にされたか、浅く土葬にされていたものを、ある期間の経過をまって取り出して甕に納めて手厚く葬るという改葬形態をとったもので、改葬の際、骨に附着したものを洗い落す儀式が存在したとすれば、最近まで沖縄を始め、東南アジア地域にその遺風が存在した洗骨甕棺葬と共通なものとなり、縄文文化後期初頭頃には日本列島に廣くこの風習があったとすれば、また興味深い問題であるが、今日不思議にもこの改葬甕棺が青森県下の全域のみに広く発見されていることもまた注意すべき問題である。一応洗骨改葬の疑ある甕棺としてここに紹介しておく。

縄文土器文化の東日本における甕棺埋納人骨は前記したごとく、一般に乳幼児骨が多く。成人骨は青森県下に見られたように高さ60センチ前後、胴部径50センチ前後の大深鉢へ、一度埋葬された骨を改葬納入したもののみで、遺体を直接収めるほどの大きさの土器は見渡らない。

また中部地方以東の縄文文化晩期後半の乳幼児甕棺は、上部口縁を他の土器で蓋をしているもの

があるが、口縁は上を向いており、その上に口縁を下にして合せ蓋としているので、横向きにした合せ口甕棺とは別種のものと考え、合せ蓋甕棺とすべきであるとする坪井清足氏の意見には賛成する。

西北九州地方を中心とした弥生文化中期に繁栄を見た所謂合せ口甕棺に類するものは愛知県豊橋市五貫森貝塚、同県一ノ宮市馬見塚、滋賀県坂田郡伊吹村（旧春照村）杉沢など縄文文化晩期の遺跡に出土例があり、五貫森貝塚例には小児人骨が納められ、磨製石斧が副葬されていた。甕棺の大きさはいずれも口径30センチ余、高さ約40センチ程度の小型なもので、成人の遺体をそのまま葬ることは不可能なものである。一の宮市史編さん室で1963年、馬見塚遺跡発掘調査に際しては、1925年に発見されたような典型的合せ口甕棺の出土は見なかったが、横倒しの深鉢土器の口縁を他の大土器片で蓋をしたものなどが、小土壙内や、土壙の周辺から出土し、小土壙中には焼けた人骨の小破片があり、島五郎教授によると、いずれも未成年のものであったという。

1963年の馬見塚遺跡の調査の成果は「新編一宮市史、資料編一」（1970年刊）に詳細に記されている。この報文で岩野見司氏は縄文文化の甕は甕棺よりも深鉢など甕以外の器形のもの多く、土器棺とするべきだと提唱をしている。

本論叢で九州地方の縄文時代の甕棺研究の特輯を企画、畏友賀川光夫教授から本号の序として「縄文時代の甕棺研究展望について、簡単に紹介を記して欲しい」との懇望を受けたが、身辺多事のため、十分な資料を見て、検討の上執筆することができず、記憶するままを本号の序として書きつらねた次第である。御寛容を乞う次第である。

なお甕棺葬の総合的資料集成は坂詰秀一氏が、1958年、立正大学文学部論叢第9号に発表の「縄文文化における甕棺葬の基礎的研究」で100例余を集めての成果を発表している。

成人用の弥生時代における合せ口甕棺は九州地方から朝鮮半島南部の広い地域に見られ、韓国全羅南道の合せ口大甕棺は高さ5メートル近い大型なものまであり、弥生文化の合せ口甕棺の起源は日本国内にあるものか、朝鮮半島に求むるべきかは、今日まだ断定し得ぬ状況にあると考える。また縄文時代前期にまで遡る東北地方の乳児甕棺、後期初頭の洗骨葬の疑ある甕棺など、九州地方の縄文文化後・晩期に見られた甕棺葬と関連あるものか、断絶的なものかもにわかに決定をなし得ない。馬見塚などに見られた縄文晩期の合せ口小甕棺は弥生文化の影響によって発生を見たのではないかとの考えを過去に発表した人もあったが、この点もまだ今後の研究に残された一課題である。

九州地方の縄文時代の甕棺葬研究を特輯した本号に発表の成果が、日本における甕棺葬発展の推移をどれほど前進し得るかは、本号発刊を待たなければわからないが、本号の企画がこの方面研究に対する一ステップとなり得ることは疑なく、編者の企画が水泡に帰することはあり得ないと信ずるものである。